

書評

●南部 鶴彦(学習院大教授・経済学)

医療を経済する

質・効率・お金の最適バランスをめぐる



編集：長谷川 敏彦，松本 邦愛

A5 頁 344 2006 年
 定価 3,360 円(本体 3,200 円+税 5%)
 [ISBN 978-4-260-00044-4]医学書院刊

医療経済学というテーマで出版されている書物は、それほど数が多いとは言えないものの、かなりの数にのぼる。これらの書物は経済学者が主たる執筆者なので、かなりの程度経済学のお作法に従っていることは避け難い。この結果として、非経済学の分野の人々にはとっつきにくい印象を与えているのではないと思う。これに対して本書は、一方で標準的な経済学の基礎を要領よく解説した部分(第I部〔頁1-114〕、第III部〔頁185-250〕)と医療に特徴的な分析手法の解説とが非常にうまく融合されているという印象を与える。

まず第I部では「効率」という概念がなぜ必要となるかを説明して、医療にも社会全体の希少な資源が投入される以上、単純に医療保障は厚ければ厚いほどよいというものではないということがミクロ経済学的手法でわかりやすく説明されている。効率というと無駄を省くということであり、医療の質の低下につながると考えている人々がかなりいるとすれば、この第I部はそれが正しくないことを有効に説いていると思われる。

第II部は医療のパフォーマンスの測り方について伝統的なアプローチと最新のものとを同時に紹介している。限られた紙幅での叙述なので、より充実した内容については専門書を読む必要があるが、A・センのケイパビリティの概念などは

将来福祉(well-being)に応用可能なものとして重要である。しかしケイパビリティと「平等」というような問題については、ここでの簡略な説明では読者は理解することが難しいであろう。とはいえ読者の知的興味を啓発するものとして、これが経済という観点から紹介されていることは大変有用である。

第III部では医療保険について、それが必要となる資源配分上の根拠が説明されると同時に、医療保険制度の歴史と仕組みの解説がある。さらに医師誘発需要仮説について、具体的な事項に沿ってこの仮設の中味について検討がなされている。ここでかなり最近の研究成果にまで言及されており、効率的な資源配分というテーマとの結びつきが紹介されていることは、読者にとって有益であろう。

第IV部は医療制度と政策にかかわる諸論点がつめ込まれている感があって、前編までとは若干異なった印象がある。いずれのテーマも非常に重要なものであり、読者に対して問題の所在を示唆するという役割を果たすものであろう。

以上を通観すると、限られた紙幅において医療を経済学から切るという目的は十分に果たされており、効率のよい教科書としての役割を今後果たすものと思われる。若干気づいた点を最後に付け加えるならば、基準薬価制度と薬剤について触れられていないことが不満として残る。

わが国においては医師誘発需要仮設の一分野として、近年薬価差の縮少があったとは言え、依然として重要だからである。

編者の序言にあるように、医療経済学と言えど診療報酬制度や病院経営ばかりを連想する医療関係者が多いとすれば、本書はそのような専門家の人々に対する知的刺激を与えるものとしても高く評価できる。